

妙本寺本『曾我物語』の訓読語について

——実字訓を視点として——

橋村 勝明

一、はじめに

妙本寺本『曾我物語』は、日蓮宗僧侶日助による天文十五(一五四六)年の書写奥書を持つ真名本である。本文には墨による仮名点と、朱によるヲコト点とが付されており、その二種の点によって訓読の様相を窺うことが出来る。現存する真名本『曾我物語』のうち、書写年代の古いものとして、妙本寺本と本門寺本とが現存し、本門寺本は妙本寺本の副本である。従って、本稿では特に妙本寺本について検討することとする。

さて、付された訓点について妙本寺本『曾我物語』の訓読法についてみてゆくと、平安鎌倉時代に於ける、伝統的な漢文訓読の方法とは異なる訓読法を見出すことが出来る。現在妙本寺本『曾我物語』において見出している限りでは、「則」「而」「是」の各字訓についてである。⁽¹⁾

しかしながら、真名本の訓読法を総体的に捉えようとするとき、助字の訓読法についてのみ検討したのではその特徴を十分に指摘したことにはならないであろう。助字の訓をもつて真名本の訓読法は特徴的であると判断するのではなく、全ての実字をも含めた訓読語について検討し、それらを伝統的な訓読法、或いは同時代の辞書における漢字と訓との関係に照らすことによって明らかしてゆく必要が有ろう。

そこで、本稿では実字訓を検討の視点として取り上げることによつて、妙本寺本『曾我物語』の訓読の実態に迫ろうとするものである。

他の点本に於いても同様であるが、訓点は全ての語に等しく付されているわけではない。部分的な訓もあれば、訓の全てを付したものもある。そこで、本稿では訓の全てが付されたものを対象とし、本文中より全て抜き出し、⁽²⁾中世古辞書との比較を行うこととする。

二、妙本寺本『曾我物語』における

実字の全訓付訓語について

まず、妙本寺本『曾我物語』に於ける全訓付訓語は、延べ語数二三二語、異なり語数二一〇語である。全訓付訓の内、二回以上その訓が見えるのは、左記の語である。³⁾

後(ウシロ)、嘸(ウタテシ)、誂(カコツ)、粧(カサリ)、岫振(カトフリ)、情(コ、ロ)、声(コエ)、笈(サ)、官(ツカサトル)、搏(ツカム)、何(ナトカ)、了(ハツ)、掇(モテアツカフ)、却(ヨク)、鳴借(ヲカシ)、少(ヲサナシ)、御(オハス)、思・想(オモフ)

これらについて概観すると、特別難解な漢字に付された訓であると言ひ難い。しかし複数回、訓が記載される意味合いについて考えようとする場合、周辺資料との比較検討が必要である。本稿では、このことについて十分な検討が出来ていない為に後の課題としたい。

さて、全訓付訓語について、まず中世古辞書のひとつ、妙本寺本『いろは字』⁴⁾に掲載される訓と比較する。

妙本寺本『曾我物語』の助字の訓に就いて、通時的にも共時的にもその訓を見出せない用例について、唯一同訓を指摘できる資料が、妙本寺本『いろは字』⁵⁾である。

妙本寺本『いろは字』は、妙本寺本『曾我物語』に名の見える日蓮宗僧日我が永禄二(一五五九)年に著したいろは引きの辞書である。両本の先後関係については、それぞれの奥書から『曾我物語』が前出であつて、『いろは字』が後出であることが確認できる。従つて、助字については前出の『曾我物語』の影響下に『いろは字』が成つた可能性が指摘できる。しかし、実字についても同様の関係が指摘できるのか、又、『いろは字』『曾我物語』の訓は同時代の辞書に照らして、如何なる性格を有しているのか、ということについて検討するために、まずは両本を比較する。比較の視点としては、次の二点である。

- 一、同一の訓に対して同一の漢字が対応している
- 二、同一の訓に対して異なる漢字が対応している

まず、一について『いろは字』と『曾我物語』における全訓付訓語について比較したところ、『曾我物語』の全訓付訓異なり語数二一〇例中、一五例であつた。

後(ウシロ)、着(キツ)、嶮(ケハシウシテ)、故(コトサラ)、声(コハ)、候(サフラフ)、鞆(サヤ)、健(シタ、カ)、示(シメシ)、束(ツカネテ)、舩艦(ツリフネに)、雙(ナランテ)、額(ヒタイ)、音(ヲトに)、思(ヲモイテ)

妙本寺本『曾我物語』と妙本寺本『いろは字』との共通性は、比較的頻用されると思われる訓と漢字との関係に見られる様で、量的に見れば七・一%と共通性が低いと言えるようである。このことについて、より客観的に検討するために他の古辞書とも比較し、右に挙げた訓と漢字との関係が中世という時代において如何なる関係を有していたかについて考察する。

更に、先の「二、同一の訓に対して異なる漢字が対応している」場合についても同様古辞書との比較によって検討することとする。

三、古辞書との比較

同一の漢字に対して同一の訓が与えられている用例について、まず検討する。比較の対象とする古辞書は、『頓要集』『撮壤集』『温故知新書』『運歩色葉集』、そして『節用集』諸本である。⁶⁾ 比較の結果を表一として示した。表は、まず『曾我物語』の所在・漢字・訓を掲載した後、同訓について古辞書を検索した結果を記している。尚、『曾我物語』『いろは字』と共通して見出せる部分には、升目に色を付して示した。

表一

所在	漢字	訓	頓要集	撮壤集	温故知新書	運歩色葉	伊京集	明心本	饅頭屋本	黒本本	易林本
二10オ	後	ウシロ			背、後						後、背
二14オ	着	キツ、			着	着	撰			着	服
二05ウ	嶮	ケハシウシテ	嶮		嶮				殊更	嶮、嶮	嶮
七23ウ	故	コトサラ			故				音、声		故
二05オ	声	コハ(声付)		音、声		音、声		音、声	音、声	音、声	音、声
八22ウ	候	サフラフ			佇						侍、候
七11ウ	鞆	サヤ		鞆	質、左右	鞆	鞆	鞆		鞆	鞆
一25オ	健	シタ、カ			健	就、健					健
三30ウ	示	シメシ			示	示		示	示	示	示
一11オ	束	ツカネテ			示						束
三24オ	舩	ツリフネに		舩	舩、舩	東					東
一10オ	雙	ナランテ			雙、串、並、方、并、駢	双、駢		示		示	雙、駢
七24ウ	額	ヒタイ	額		額	額、類		額	双	双	雙、駢
五22ウ	音	ヲトに			風	額、類	額、類	額、類		額、類	額、類
八02ウ	思	ヲモイテ			思	信	信			思、念、懐、想	思

表一より他の古辞書と比較しても、「鞞」(サヤ)、「額」(ヒタイ)等漢字と訓とが一对一对応である様な、比較的密接に関わっている関係が指摘できる。逆に他の辞書には見出せず、『曾我物語』「いろは字」に於いてのみ認められる漢字と訓との関係というのは指摘できない。

つまりそれは、実字に於いて妙本寺本『曾我物語』と妙本寺本『いろは字』とは共通の訓を有する場合があるが、そのような漢字と訓との関係は、共時的視点から見れば相当に一般化している場合に於いて認められるのである、ということがいえるのである。

次に、同じ訓に対して異なる漢字が与えられている場合についてであるが、それは何れかがその資料に於いて特徴

的な訓読・或いは訓の記載をしていると考えられる。そのような用例は四三語存する。そこで、異漢字・同訓の用例〔曾我物語〕「いろは字」の順)について掲げ、中世の古辞書と比較して当代の漢字と訓との結びつきとして適当な資料が、妙本寺本『いろは字』、妙本寺本『曾我物語』の何れであるかについて検討する。比較の結果として、表二に示した。尚、『曾我物語』に共通して漢字が見出せる部分には下線を、「いろは字」と共通する漢字が見出せる部分には升目に色を付して示した。

表二

所在	漢字	訓	いろは字	頓要集	撮壤集	温故知新書	運歩色葉	伊京集	明心本	饅頭屋本	黒本本	易林本
四14オ	項	アイタ	間			間	間				間、際	
二04ウ	諦	アキラカニ	明			明、陽、在、 葵、隱、菊、 仕、葵、塏	明、審			明	察、審、明	明
七19ウ	哢	アサケル	嘲	皆		嘲、俯	嘲、嗤	嘲、嗤	哢、嘲	嘲	嘲、哢	嘲、哢
八04オ	射	アソハス	遊			読						
一07ウ	浮	アタナル	不覚									
八20ウ	中	アタリテ	当		中			中				
十31ウ	集聚	アツマルとそ	轅			中、配		中				
八21ウ	蔑	アナツリツ、	侮			会、聚、集、 寺、朝宗	侮、慢、懷	蔑如、侮、 慢	侮、慢	侮	集、群	
二27ウ	諍	アラソヒテ	争			易、侮、媿、 易、侮、媿、 奴、争、諍	争	争	争、競	争		炳然、明

九10ウ	二28オ	八28ウ	五18ウ	二05オ	九10ウ	九16ウ	九17オ	四08オ	七19ウ	八13ウ	十33ウ	九22ウ	六12ウ	二03オ	五11ウ	一28ウ	八28オ	八20オ	十33ウ	八18オ	所在
強	敵弱	巽	灌	道	強直	磚	鋳	鈔	擊	笏	藪	謎	扨	此	粧	隠	乾	叔父	沙	瞋瞋	漢字
ツヨクする	タラヤカニシテ	クツミ	ソ、キ玉シカハ	(手道) スサヒシテ	スクヤカに	スカシテ	シノキを	サ、ヤキ	サ、ケ	サ、	サクかと	サカシラを	コホレケレは	コ、に	カサリを	カクル	イヌキ	イトコ (「ヲチ」カ)	イサコに	イカリイカツテ	訓
勁	透進	辰巳	肥沃	遊(手遊)	狡、健	賺	篠	小音	猷	篠	咲	譏言	適	斯	飾	虧碑	戌亥	從兄弟	鞦韆	呵、朦朧	いろは字
			澗、灌、濺							小竹								從父兄弟			頓要集
																					撮壤集
勁	跡象、嬋婚	巽	灌	手談	健	誑、偽、道		耶、驚破		篠	呻	譏言、譏、 岐、賢良、	這	近、是、此、	瑛	寧	隱、心、寃、	從祖兄弟	沙、砂	嗔、鼻、志、	温故知新書
強		辰巳、巽	灌、濺、 洒、瀦、		健	瞋		啞、哆、呬				進心、 寄言、 統語				藏、隱、運		從父兄、 從父兄、 從母兄、	砂	患、忿、志、	運歩色葉
				手談				耳語		篠		諷利、 刺說			飭			從父兄、 從子、			伊京集
			灑							篠					飭	乾		從子	沙、砂	怒	明応本
	嬋婚		洒	手談				耳語		篠		和譏			飭	乾、戌亥		從子	沙、砂	怒	饅頭屋本
		巽	灑	手談	健				捧						飾	乾		從子		怒、瞋、瞋	黒本本
強、剛	嬋婚	巽	洒	手談	健	偽寄		私言、訓、 呬		篠		和譏、 諷利、			飾	潜	乾	從弟	沙	愠、怒、志、	易林本

八24ウ	二26オ	七21オ	五12ウ	七20ウ	八02ウ	九20ウ	三05オ	七29ウ		七29ウ	七16ウ	一25ウ	七25ウ	所在
許	八萬	搏	墳	客	廻	額	倍	綜		彼	庇	了	挾	漢字
ユルシ	ヤウヨロツノ	モミニ	ミサ、キ	マレヒトノ	マハシテ	マツカウに	マサル	マキレテソ		フルマイの	ヒサシマテ	はて	ハサミツ、	訓
寛	八百万	椽	陵	少人	転	正面	勝	紛	将息	化儀、 役用、	廂	終	夾	いろは字
			陵											頓要集
											廂、庇、廂			撮壤集
					迷向	末額、 額中、		紛	級舞、 行跡	行、儀、 姿、	檐、廂、 廂、趾	交		温故知新書
			陵		正面	真向、	勝	紛	振舞	庇、 廂	庇、 廂	挾、 夾		運歩色葉
		扱	陵							彼、 翔	庇、 廂			伊京集
容、赦										振舞	庇、 廂			明心本
釈、赦		扱、揉	陵				勝			翔、 振舞		挾		饅頭屋本
免、許、 容、赦		扱、揉	陵				勝			翔、 振舞	庇、 廂	挾		黒本本
施、免、 許		扱、揉、 扱	陵		廻	真向、 正向	賢、多、 愈			振舞	庇、 廂	挾		易林本

表二より、妙本寺本『いろは字』と妙本寺本『曾我物語』

した通りである。

とが異なる訓を掲載している組み合わせについて、他の辞書で掲載状況を調べてみると、表一で見出された様な、密接な漢字と訓との関係は比較的少ない。一つの訓に対して何種類もの漢字を掲載する辞書について、それらを一つの共時態として捉えたとき、『曾我物語』『いろは字』両本に同じ漢字と訓との対応関係を見出せる組み合わせは左記に挙げる四通りである。また、その組み合わせの数は下に記

- 一、『曾我物語』のみに見出せる 5例
- 二、『いろは字』のみに見出せる 11例
- 三、『曾我物語』『いろは字』に見出せる 8例
- 四、いずれにも見出せない 19例

『曾我物語』『いろは字』の漢字と訓との関係を、他の

辞書と比較したとき、四のいずれにも見出せない組み合わせが最も多く見られた。しかし、表二から見て取れるように、古辞書によつて掲載する漢字に多様性が見られ、先に表一として掲げた漢字と訓との関係に比すると、漢字と訓との関係性そのものが緊密でないように見受けられる。

そのような中であつて、「項」(アイダ)の様に、妙本寺本「いろは字」の訓が共時的に古辞書と比較した場合一致する数が十一例と、「曾我物語」の用例五例に比して僅かながら多い。果たしてこの僅かな差異が有効であるのか否かについては更に詳細に検討してゆく必要がある。

いずれにしても、先に掲げた一・二の視点より、妙本寺本「曾我物語」の実字の全訓付訓語と、妙本寺本「いろは字」における訓との関わりは、助字に於ける関わりほど密接ではない、ということが指摘できる。

四、まとめ

右の検討を通して得られた結論は、左記の三点である。

①妙本寺本「曾我物語」と妙本寺本「いろは字」との訓の共通性は低く、妙本寺本「いろは字」は特に妙本寺本「曾我物語」の影響下に成立したものではないこと。

②中世古辞書と比較すると、妙本寺本「曾我物語」・妙本寺本「いろは字」のみに共通してみられる訓は見出

せないこと。

③従つて、妙本寺本「いろは字」と比較した限りに於いては、妙本寺本「曾我物語」における訓読上の特徴は助字に存すること。

妙本寺本「曾我物語」の訓読法の特徴が助字に見られるということは、恐らく訓読の背後には仮名本の真名化という作業が存したであろうし、その際に無理の生じた部分、つまり仮名を漢字に置き換えた結果が形態上「訓読」として表出しているのではないかと考えられる。「訓読」の問題であると同時に「用字」の問題でもあると考えるのである。

今後の課題としては以下の事柄を挙げることが出来る。本稿では漢字の訓のみを比較の対象としたが、同訓異義語の可能性などについて検討の余地が残されている。また、古辞書との比較に於いては、概観を示したに過ぎない。更に、より精密な検討が必要となる。

また、真名本に於ける漢字と訓との関係について、妙本寺本「いろは字」と比較したが、「いろは字」は上巻の「い」く「く」部分が欠損しており、「や」以降しか現存しない。従つて、「曾我物語」に存して「いろは字」に掲載されない訓・漢字についても検討しなければならない。

注

(1) 以下の拙稿による。○妙本寺本曾我物語における「則」

字訓について（『国文学攷』一五七号、平一〇・三）、○中世真名本に於ける「而」字の用法と訓とについて（『鎌倉時代語研究』第二二輯、平一一・五）、○妙本寺本『曾我物語』の「是」字の用法とその訓とについて（『国文学攷』第一六四号、平一一・一二）

（2）全訓付訓語の認定については、朱点・墨点の別なく扱うこと、助字・固有名詞を除くことの二点に留意した。

（3）表記については、本文よりそのまま引用した。以下本文中に引用したものについても同様である。

（4）鈴木博著『妙本寺藏永祿二年いろは字 影印・解説・索引』（清文堂、昭四九・五）

（5）注（1）論文を参照されたい。

（6）中田祝夫・根上剛著『中世古辞書四種研究並びに総合索引』（風間書房、昭四六・七）、中田祝夫著『古本節用集六種研究並に総合索引』（風間書房、昭四三・四）